

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13133

研究課題名(和文)アスペルガー障害の感情へのガイダンス・カウンセリング法の開発

研究課題名(英文)Development of techniques for regulating feelings in the people with Asperger disorder.

研究代表者

須田 治 (Suda, Osamu)

首都大学東京・人文科学研究科・客員教授

研究者番号：50132098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：アスペルガー障害(ADと略)の社会的困難を心理学的に援助する方法を洗練することを目的として、この研究はなされた。親や本人へのガイダンスとカウンセリングを組み込んで、行動支援を行うものを、情動調整の支援方法としてデータを取り検討してきた。結果的に、人工的な行動療法などと比較すると、発達支援で得られるデータが、現実の生活では有用であると考えられるようになった。たとえば縦断的な困難の軽減変化が、日常の家族のやりとりの変化の影響、背景にある個人的特徴などが記述されるといえる。成果は、著書として須田(2017)および編書として須田(2018;印刷中)により発表される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore new psychological treatments for the people with Asperger disorder(AD). So, examining practical methods is our chief interest of this study. To reduce AD subjects' socio-emotional difficulties, we obtained sets of data practically. We examined how their emotional or arousal states could be regulated by case-based data. We obtained the data of behavior-based treatments, psychological guidance for their parents, or counseling for the subjects. We came to find diversity of disorder among subjects (including family involvements) were important factor to determine outcomes of useful and valid treatments. The research was published in a theoretical book (in Japanese), Suda, (2017) and is going to be published in an empirical book (in Japanese), Suda, (2018 in print).

研究分野：発達心理学

キーワード：アスペルガー障害 自閉症スペクトラム障害 情動調整不全 対人関係発達 発達支援 縦断研究 カウンセリング

## 1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害のなかでもアスペルガー障害 (AD と略) は、知能発達の遅れ・言語発達の遅れの著しくない障害とされているが、その特徴ゆえに自閉系の対人関係の困難を具体的に示していると考えられる。そのようなケースに対する支援方法としては、緊張緩和させる行動支援とともに、本人への直接のカウンセリングや養育者へのガイダンスが有効であることが検証される必要がある。その検証から支援が再考されるようにこの研究は企画された。

すなわち情動の調整不全が、AD の人びとの人とのやりとりの困難にかかわると想定して、上記のとおり探索的研究を行うことにより、調整を容易にする対応の仮説が生みだ出せると考えられるのである。

とりわけ現実の対象者の感覚過敏や、喚起の上昇と緊張、対人間のトラブル、自己の感情像の理解の困難などは、今までよりも具体的にやりとりを制約していると考えられ始めている。須田 (2017) には、その辺の問題を整理している。

これまで AD ケースへの支援は、しばしば支援を誤らせる発想として、< 孤立を超えて、他者との共感的主観性の成立をめざすことを教えるべきだ > という認知内容の修整を求める目標が誤って設けられることがあった。それはただアスペルガー障害の人びとには、共感の押し付けとして嫌われてきた。また直接的な支援以上に、家に帰ってからの対応、環境調整がじっさいの変化の要因であっても、十分な議論はなされてこなかった。

そもそもじっさい求められる支援技法とは、自発性を重んじるとともに、人格を尊重するガイダンス (指導) であり、かつカウンセリング (相談) であるといえるだろう。

それゆえ支援では、支援者と対象者・家族とのあいだの情動の微妙な調整があり、かつそれがきわめて重要であるとみて、それをデータを含めて呈示することが、新しい支援方法論には必要であると考えた。本研究はその方法論を纏めていくため、実践と知見を包括的にとらえ、報告することにした。

## 2. 研究の目的

### (1) 障害についての理論的探究

本研究の目的の最初は、アスペルガー障害 (AD) における情動発達上の機能的弱さを検討することである。脳神経発達にかかわる分子生物学的知見、生理・行動的な喚起にかかわる ASD の知見、情動観察を踏まえた発達心理学的研究などを踏まえて、支援研究が evidence-based になるためにどのような方法論が必要かを件津男してまとめることにした。

情動発達が ASD、とくにアスペルガー障害における適応にかかわる情動調整とどうかかわるかについて、つぎの3側面を検討を研究史的にとらえ直した。すなわち

- ・身体的な喚起の調整の問題
  - ・関係にかかわる人と情動調整の問題
  - ・感情の体験による主体感の問題
- である。

### (2) 実践的を踏まえての方法論の検討

本研究の目的の二つ目は、アスペルガー障害への具体的な発達支援の実践例を介して、どのようにしたら当事者主体の内発的な情動問題の軽減ができるかを、(親の報告を含む) 質的分析、行動のマイクロ分析などにより、記述したものをデータ群としてまとめていくことがまずある。その結果に基づき、行動水準の支援方法、カウンセリング的対応、保護者へのカウンセリングなど、各支援におけるまとめを、調整の進め方としてまとめることにした。そこから、発達支援の実践上の方法論の中核的な成分をとれていくことにした。

## 3. 研究の方法

二つのタイプの対象者からデータを得ている。第一群は、近所の幼稚園から来室したり、小児精神科に相談ののちに、来室した大学の発達サポート室のケースたちである。この幼児のケースには、およそ二週に一度の支援をケースごとに行い、縦断的データを得ていった。ASD の子どもだけ取り上げている。

第二群は、青年のアスペルガー障害の人びとであり、親の会を介したりして、実験として公募した青年のケースの方々である。幾つかの支援実験への参加をお願いした。

支援としては幼児の群も、青年の群も、助言ガイダンスとカウンセリングを経過のなかで記述した。

アセスメントには、知能検査も入れ、また情動表出も分析している。診断名は、アスペルガー症候群と広汎性発達障害というものに絞った。

ビデオデータと支援報告をもちいて、①幼児ケースに関しては時系列的な変化を分析し、また支援内容とのつき合わせを行っている。②青年ケースに関しては、マッチングされた健常者とアスペルガー障害者との間の比較を微視的分析として行った。

## 4. 研究成果

### (1) 理論的探究

ASD の情動発達についての研究史的な成果は多岐にわたっており、特定の実践的な経験を踏まえてまとめることが有効であるといえる。その理論的なものを須田 (2017) でまとめている。17世紀ころのスピノザから現代の脳神経科学者ダマシオに繋がる情動システムの説明を踏まえて、アスペルガー障害が示す情動的な人間関係の困難を論じている。

### (2) 発達支援の方法論の探究

ASD のうちのアスペルガー障害についてのデータをまとめた形の知見も得ており、それ

らを踏まえて、発達支援はどのようにあるべきかの検討を進めた。いわばロジャース全集のように、個別課題にかかわる形で、データを科学哲学のポパーのいうように「反証可能なデータ」として示しつつ、アスペルガー障害の情動的困難の増悪の仮説と、軽減の仮説を提示してみた。

#### ①幼児発達のデータから

情動的困難の増悪は軽減と別の仮説でとらえることが、発達支援では適切であると結論付けた。須田（編/著）（2018）はそれを取り発表している。増悪過程では、因果的な説明で情動トラブルが起こる説明が可能である。しかし軽減過程には、むしろ広範囲の生活環境の調整や、保護者へのガイダンス、当事者へのカウンセリングが有用であると縦断的变化は示唆している。

#### ②アスペルガー障害青年のデータから

健常者とのマッチングさせたペア間の比較で実験条件下での情動行動の表出の相違を微視的に分析した結果では、アスペルガー障害の人びとの情動表出に共通した弱い特徴があり、それは情動感染されにくいというように推測された（部分のみ発表済み）。

そういう情動発達の特徴を踏まえたうえで、ケースごとに行ったが、カウンセリングを行ったが、当事者はそういった自らの特徴を意識していないことが解ってきた。

#### ③まとめ

とくに幼児期においては、縦断的な発達支援を行うことの意義は有効な支援仮説の検証方法であることが、現在印刷中の須田（2018）で発表されることになる。

公認心理師の国家制度化が進むなかで、家庭の日常と連続性のある自閉症スペクトラム障害への支援がしだいに重要な技法になっていくことだろう。その方法は、大学院・学部のカリキュラムにもなされていず、これから先の課題になるだろう。すなわち「家庭との繋がりのある発達支援」の科学的思想が必要になってくると考えられる。本研究はそれを前提として、ラウンドテーブルなども本報告には記載しなかったが何度も繰り返してきた。

#### <引用文献>

須田治 2017 『感情への自然主義的アプローチ:自閉症スペクトラムへの発達支援』金子書房。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

#### 〔雑誌論文〕（計 3 件）

①須田治, 2018, 情動発達支援: ASD への自然感情チューニング, 臨床心理学(金剛出版), 査読無, 189-192.

②下川昭夫, 2017, 支援がとどきにくい子どもたちに目を向ける必要性 : 学習や生活

の課題の背景に示唆される知的機能面の課題. 心理臨床学研究, 査読有, 35(2), 168-179.

③下川昭夫, 2016, 中1ギャップの背景にある児童生徒の学習と生活の課題について-小学校と中学校での3年間の調査を通じて-, 首都大学東京人文学報, 査読無, 512-4, 27-43.

#### 〔学会発表〕（計 4 件）

ラウンドテーブル・シンポジウム, 第二著者などを除く。

①須田治, 2017, 自閉症スペクトラムケースに見出されたこだわりの変化: 食物感覚過敏と情動喚起の調整の困難がこだわりを生みだし, パニックを組織する, 日本発達心理学会第28回大会, 2017年3月25日~27日, 広島国際会議場(広島県広島市).

②須田治・西田麻野, 2016, 自然主義的接近法による情動への支援(1): 行動の微視的分析による問題への接近, 日本臨床発達心理士会 第12回全国大会, 2016年9月30日~10月1日, 大阪国際交流センター(大阪府 大阪市).

③須田治・西田麻野, 2016. 自閉症スペクトラム障害成人の情動表出の特徴(2) イプサティヴデータによるアセスメントの試み. 日本発達心理学会第27回大会, 2016年4月29日~5月1日, 北海道大学(北海道・札幌市).

④下川昭夫, 2016, 学習・生活上の課題における中1ギャップは存在するか?-小中担任の「要配慮」判断および児童生徒の「支援ニーズ」に関する調査を通して, 日本心理臨床学会第34回秋季大会, 2015年9月18日~9月20日, 神戸国際会議場他(兵庫県神戸市).

#### 〔図書〕（計 3 件）

①須田治（編・著）, 2018, 金子書房『生態としての情動調整: 心身理論と発達障害』, (印刷中).

②須田治(著), 2017, 金子書房, 『感情への自然主義的アプローチ: 自閉症スペクトラムへの発達支援』.

③須田治, 2016, 福村出版, 情動調整(田島・長崎・岩立(編)『新・発達心理学ハンドブック』所収, 1004のうち(453-461)).

#### 〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：  
○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

須田 治 (SUDA Osamu)  
首都大学東京・人文科学研究科・客員教授  
研究者番号：50132098

### (2) 研究分担者

下川 昭夫 (SIMOKAWA Akio)  
首都大学東京・人文科学研究科・教授 研  
究者番号：90330729

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )